

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 山口 飛 所属： 沖縄県立大平特別支援学校 記録日： 平成 29 年 2 月 11 日
キーワード： ダウン症, 読み書き支援, 見通し, 自信

【対象児の情報】

- ▶ **学年** 小学部 6 年 (CA12, 女児)
- ▶ **障害名** ダウン症候群
- ▶ **障害と困難の内容**



☑知的障がい

- IQ58 (田中ビネーV), SQ61 (新版 S-M 社会生活能力検査)
- とても活発で積極的に学習に取り組むことができる児童だが、新しい課題や未定着の課題を前にすると、急に黙って固まってしまう、学習を進めることが難しくなる。その際に感情が不安定になって、大きな声を出したり、時には友達をたたくこともあり、本人は涙を流してとても辛そうである。取り組んだばかりの課題や、以前に正解した課題でも同じような行動がみられることから、「できる」や「わかる」という見通しが持ちにくいのではないかと考えている。
- 本人の言動からは、失敗に対する恐怖、人から教わることに強い抵抗感があることが窺える。
- エピソードとしてみえてきた困り感は以下の通りである。
 - ① 記憶を保持して定着させることが当初考えていた以上に難しい。
 - ② 耳からの情報を処理することが苦手。
 - ③ 本人のやる気とは不釣り合いに集中が持続しない。

【活動進捗】

▶ 当初のねらい

課題に対して「できる見通し」を持ち、安心して学習できるようになる。

※ ゆっくりとしたペースだが、見聞きしたことや経験したことは着実に身につけていけるのが対象児の強みである。このことから、学習経験を重ね広げる機会の保障が重要と考えた。

▶ 実施期間

平成 28 年 5 月 9 日～平成 29 年 2 月 7 日

▶ 実施者

山口 (報告者に同じ)

▶ 実施者と対象児の関係

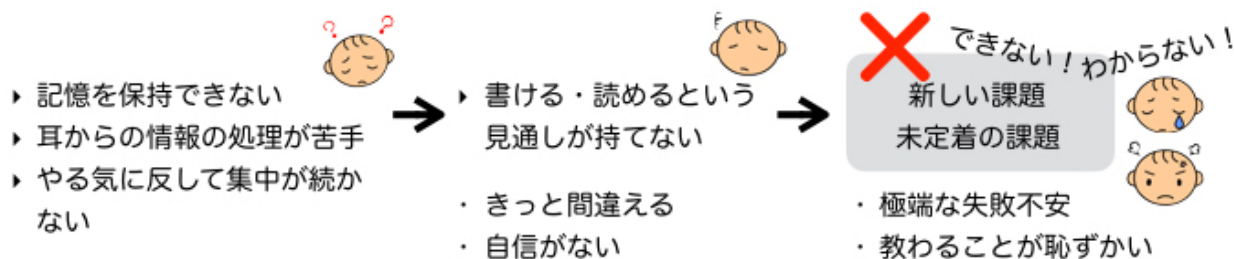
学級担任および教科担当 (国語・算数)

【活動内容と対象児の変化】

▶ 対象児の事前の状況

- 生活面では、いくつか課題はあるものの身辺処理もほぼ自立。発音に不明瞭さはあるが、日常会話では困らない程度で、コミュニケーション力も高い。
- 学習面では、平仮名はほぼ定着、カタカナは未定着、漢字は 1 年生で習う漢字の読みをいくつか理解している。生活力が高い児童なので周囲の期待も大きく、保護者も将来のため学校に対してとりわけ教科学習の充実を期待している。

- 既にできること・わかることについては、友達に教えたり、競ったり、挑戦したりしようとする意欲もみられ、活動にも積極的である。このような実態と、人の世話を妬くのが好きなことから、保護者は将来的に保育園で補助員の仕事ができないかと現時点では緩やかに考えている。
- 本研究で対象とする困難の状況と実態をまとめると下の図のようになる。



iPad で困難を改善できるのではないかと = 「できる見通し」を持てるようになるのではないかと
使いこなせるようになることで、自分から学習経験を広げることが期待できるのではないかと

▶ 活動の具体的内容

対象児のそれぞれの困り感に対して、次のような支援の方策を考えた。

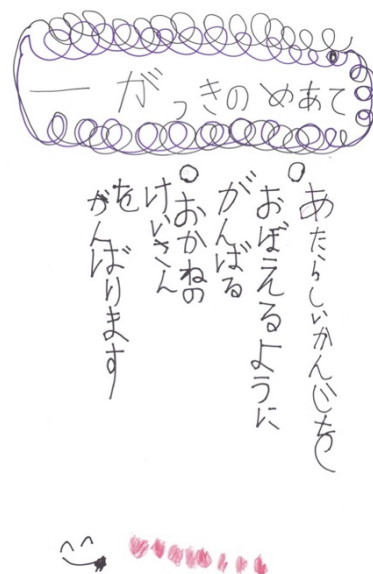
- 記憶を保持できない： 振り返りの手段としてメモなどの手段をもてるようにする。
- 耳からの情報の処理が苦手： 画像や動画で理解に必要な情報を補完する。
- やる気に反して集中が続かない： 注目の範囲を限定し課題の終わりを明確にする。

文字学習と iPad

対象児は国語の個別学習（週 1 時間）や家庭学習で、文字（漢字やカタカナなど）の学習に取り組んでいる。文字の学習は、児童にとって特に「できる見通し」を持ちにくい学習場面である。ただ学習の機会も多いため必要性が高いこと、本人が 1 学期のめあてを「新しい漢字を覚えたい」としたこと、保護者から「漢検を受験させてほしい」という家庭訪問で要望があったことなどを踏まえて、ここでも iPad を活用して見通しを持ちながら学習を進めることができると取り組みを始めた。iPad は児童にとって普段から慣れ親しんでいるツールであること、また「やってみようかな」という動機づけに優れ、アプリの選定や活用の仕方によっては、その困難さを解消する手立てとなると考えた。

児童の生活や将来の姿に照らして文字学習の意義を考えると、文字による記録は経験したことを振り返り苦手な記憶の保持や定着のための手段になり、メールや SNS を通したコミュニケーションの手段として活用できる。また読める文字が増えることで、今後受け取る情報を増やすことができるだろう。さらに、ある程度の読み書きの力（少なくともひらがなとカタカナの読み書き）は、将来的に仕事をする上でも必要なスキルとなるだろうと考えた。

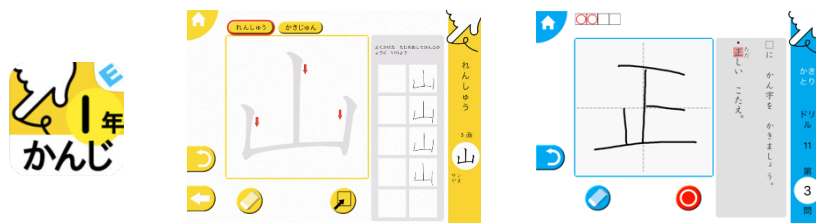
しかしながら、書字については苦手意識も強いため、「正しい文字が書けるようになること」「漢検を合格すること」をねらうべきではない。したがって、必ずしも手書きにこだわるのではなく、「文字として表現できること」「意思を伝えること」を重視して、パソコン入力や予測変換も視野に入れた上で取り組みを進めた。



使用した主なアプリ

文字の学習では、いくつか試行した上で児童が「使いやすい」と評価した「ゆびドリル」というアプリを主に活用した。このアプリは書き順を動画で確認できたり、練習で上手に書けた文字を記録したりすることができ、読み・書き取りの問題では正解するとマスが○で埋められて「終わり」がわかりやすいデザインになっていることが、児童にとっては使いやすかった理由であると思う。

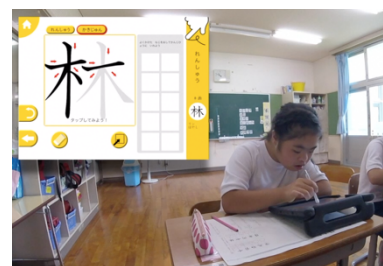
また、学習日や問題に取り組んだ回数、正答率を自動で記録し、間違えやすい文字をリストアップする機能もついているため、学習の振り返りがしやすく、変化を実感しながら学習できた。



学習の実際

新しい文字・未定着の文字については、まず iPad で書き取りの練習と読みの確認をして、そのあとで練習問題に取り組んだ。アプリの設定によっては書き順や画数を判定することができ、間違えると「正しい文字を書きましたか…」というポジティブなフィードバックで確認を促してくれることで、間違えたことに過剰に反応することが少なかった。ただ、書き順や画数については、表現や意思伝達においてさほど重要な要素だとは考えていないので、児童の反応をみて判定機能をオフにした。

プリント学習では回答を全て埋めることにこだわり、わからない問題があると次の問題に進めなかったが、アプリではわからない問題があると書き取りの練習に戻って確認をしてから、再び解くという手順をとることで納得して学習を進めることができた。活用に慣れてくると左手にスタイラスペン、右手に鉛筆を持ち、できそうな問題は iPad を使わず、自信のない問題になると、間違えないように慎重になって確認をしながら、自分で判断して学習を進めるようになった。読みについては、OCR の機能があるアプリや手書き入力、読み上げ機能を使って、自分で確認するようになった。

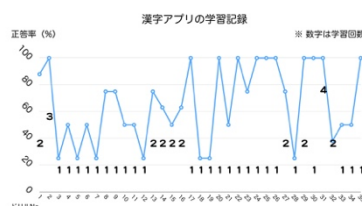


▶ 対象児の事後の変化

学習の習熟度について

カタカナについては、活用前は 10 文字以上未定着の文字があったが、活用後 1 ヶ月ほどでほぼ定着した。また使用したアプリでは拗音・促音を区別するため、徐々に枠を意識して書くようになり、以前は自分で書いた文字を読み返す時に読めないことや読み間違えることが多かったが大幅に改善した。

アプリの学習記録をみると、徐々に正答率が向上していること、苦手な問題を自分から複数回解いていることがわかった。また、習熟度の確認のために活用している漢検の模擬テストでは、1 年生で習う漢字の 8 割程度を安定して読み書きできるようになった。



【報告者の気づきとエビデンス】

▶ 主観的気づき

- ① 文字の読み書きや表現に自信が付き、課題に対して見通しを持って学習できる安心感が芽生えたのではないかな？
- ② 文字を読むことの楽しさや、手段として文字を活用する良さを感じることができたのではないかな？

▶ エビデンス（具体的数値など）

①について

• 授業での様子

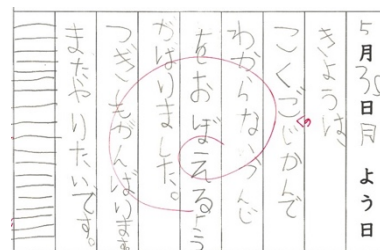
課題を前に学習が止まってしまうことがなくなり、友達に教える姿もみられるようになった。また他の授業でも積極的に手をあげたり、自分から前に出ることが多くなったことで、まわりの教師から褒められる機会が増えた。7月末に行ったインタビューでは「難しいと思っていた問題を自分で解けたのが一番嬉しかった」と語っていた。



• 児童の日記より

これまで宿題の日記には教科学習のことはほとんど書かれず、書かれても「こんな授業をしました」という報告のようなものだったが、授業を振り返った感想が「がんばります」「できた」「挑戦したい」「またやりたい」などの前向きな言葉で書かれるようになった。これにともなって、他の授業でも積極的に手をあげるようになり、「もっと難しいのを出してほしい」と言ったり、間違えたりうまくいかなかった集団学習の授業でも手をあげて「難しかったけど頑張りました。次も挑戦したいです」と感想を発表することもあった。

また、ある日記ではiPadは自分にとって「魔法の机」と表現し、安心して勉強するために必要な道具だと語っていた。



• 連絡帳での保護者のコメントより

毎日家庭とやりとりをしている連絡帳には次のようなコメントがあり、学校での学習方法がしっかりと定着している様子や児童の気持ちの変化と、それを保護者がどのように感じているかなど窺うことができた。

「間違えてもすぐに切り替えることができるようになった」

「やる気満々だったのに、宿題が入ってなくて残念がっていました」

「わからないところになると iPad で確認して、辞書のように使いこなしていました」

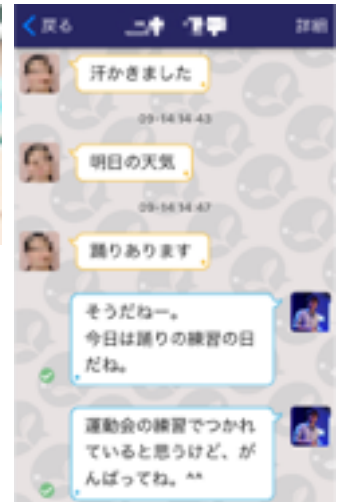
「前みたいに“わからない”と言って泣き出すことがなくなりました」

などのコメントや保護者の肯定的な評価が書かれていて、児童の気持ちの変化を窺うことができた。

②について

- SNSやメールで友達や教師に毎日メッセージを送り、会話を楽しむようになった。また予測変換で正しい文字を選んだり、アプリで調べたりして、積極的に漢字を使うようになった。
- 休み時間に芸能人や相撲の情報を探したり、TVで気になったニュースを調べて友達や教師に話したり、アイドルの曲の歌詞を調べたりするようになった。

- 読めない漢字があると、自分で調べたり、知っている漢字から似た文字を探して読んだり、訓読みに変えたりして納得しながら読み進めることができた。
- 読み聞かせの授業では、自分から手を上げて読み手になり、感情を込めたり工夫しながら読むことができた。



▶ そのほかのエピソード

習熟度の変化をみて保護者と話し合いのうえ、1月13日に漢検10級を受けた。2月には9割程度の得点で合格通知をもらい、児童にとって少なからず自信につながる結果になったことを嬉しく思う。

文字を安定して読むことができるようになったことで、学習発表会の配役や行事の司会などで積極的に自分の役割を担えるようになった。自分から台本を持って帰って家で練習してきたり、友達のセリフも覚えて教えてあげたりする場面もみられた。最近では授業のまとめの感想発表などでも、毎回手を挙げて発表をするようになり、自分の考えを積極的に表現することができるようになった。

▶ 今後の課題

今年度の取り組みを通して、学習を進める上で必要な安心感を得ることができた。とりわけ「できる見通し」を持ちづらかった文字の学習に対しても、挑戦しようとする姿勢もみられるようになり、今後は学習経験を広げていくことも期待できる。

ただし、読み書きの困り感が露呈する状況で、過度に学習成果を求めるような指導の方向性は、対象児の失敗不安をさらに深刻化させ、喚起された挑戦への意欲や学習における動機付けを阻害することになりかねない。したがって、文字を活用して「知りたい・学びたい」という思いを大切に、対象児のペースで学習を進めることができるように支援を進める一方で、その発達を当該年齢の一般的な書字速度や判読性の水準と照らしつつ、情報を受け取る機会や学習活動へのアクセスを保障するための手段として、iPad等を活用した代替的な支援策を引き続き準備する必要がある。

そこで、今後の課題設定を以下のように考えている。

- 「歌を唄いたい（唄わせたい）」をかなえるために

最近では余暇のひとつとして、YouTubeで歌詞入りのカラオケ動画を探して唄うことにはまっていて、それが読む力を高める機会ともなっている。また「千本桜」という曲が特に好きで、「私も初音ミク（ボーカロイド）に自分で作った歌を唄わせたい」といったアイディアが出てきた。

まずは簡単な替え歌から始めて、自分がつくったものを家族や先生、友達に披露することで、伝える喜びや文字や言葉で表現することの楽しさを味わう機会としたい。また、その過程では、文字や言葉を活用して、自分の考えや思いを伝えるための工夫を学ぶことができると考えている。

- 「本を読みたい」をかなえるために

これまでは図書室でも図鑑や絵本を手にとることが多かったが、先日「『君の名は。』が読みたい」とボソッと saying。以前、好きなアニメの漫画を準備してみたが、あまり興味を示さなかった。ただ対象児の「読みたい」という言葉には、姉妹や年齢の近い親戚が普段からやっていることを、いつか自分もしてみたいという気持ちが隠れているのではないかと思う。

そこで漫画や児童レーベルの小説などでも、文字認識やスピーチ機能を使うことで読むことができるという経験をすることで、読みたい本を見つけ、それを読むためにはどうすればいいかを自分で探していけるように支援を続けていきたい。

- 読みの置き換えがみられる熟語（左右），書き間違いやすい濁音や半濁音，形を捉えにくい漢字（車・貝），鏡文字になる文字（さ・ち・ヨ）について

これらの多くは構音に困難さがあり発音が不明瞭なところにひとつの要因があると考えている。これまでも読みに自信のない箇所では音声読み上げを使っており、自分の声を被せるようにして読むという活動を始めている。間違いに気づいたら戻って再度読み上げるなどして、多くの場合はうまくいっているが、音声読み上げが間違える場合もあり方法としては課題が残る。

- 中学部進学に向けて、学習における配慮や課題について校内で共通理解を図る。